

岐阜県が日蘭シンポ

6月に 計画 治水テーマに意見交換

岐阜県が、治水をテーマに日本とオランダの研究者が意見を交わす「日蘭シンポジウム2009」の開催を今年六月に計画している。

明治時代にオランダ人土木技師ヨハネス・デ・レーケが岐阜の治水にかかわった縁もあり、あらためて技術面などで協力関係の構築を目指す。

今年は一六〇九(慶長十四)年に日蘭の交易が正式に始まって四百年の節目。東海地方に大きな被害を与えた

伊勢湾台風から五十年を迎えることから、治水の重要性を国内外に訴えるためシンポを企画した。

大垣市など同県西濃地域はかつて堤防に囲まれた輪中が広がり、木曾、長良、揖斐の木曾三川の洪水被害に悩まされた。オランダも国土の多くを干拓地が占め、古くから治水に力を注いできた。

デ・レーケは明治政府の招きで一八七三年に来日。毎年のようにはらんしていた木曾

三川の改修工事を最新の知見で指導した。デ・レーケが手掛けた砂防ダムは今も県内各地に残る。

シンポは「迫り来る巨大水害にどう対応するか」をメインテーマに開催。

六月二十五―二十七日に大垣市内で開き、外務省所管の財団法人「日本国際問題研究所」との共催を予定している。

デ・レーケが手掛けた砂防ダムの一つ、同県海津市の「羽根谷巨

石堰堤イシノヱ」を出席者らが視察することも計画している。